明治維新150年
維新のふるさと
鹿児島

西郷どんとさるく 温故維新マップ 寄道

故きを温ねて　維新を知る

西郷どんと菊次郎展

特別展報告

▌と　き：平成30年7月1日（日）～8月31日（金）
▌ところ：鹿児島市 維新ふるさと館

▲期間中、約46,000人の観覧者があった

西郷どんと菊次郎

西郷どんと愛加那との間に生まれた長男、菊次郎。「菊次郎の「菊」は、西郷どんが奄美大島で名乗っていた「菊池源吾」からついたといわれています。

九歳のときに鹿児島の本家に引き取られ、十三歳にしてアメリカ留学へ。十七歳の時には父と共に西南戦争に従軍しました。しかし、この時右足に弾を受け、菊次郎は、膝下切断の重傷を負ってしまいます。

「おいは、這いつくばってでも、父上についていきもす！」

決死の覚悟とは裏腹に、西郷どんの計らいで老僕の熊吉に背負われ、政府軍である叔父、西郷従道のもとへ。無念の降伏でしたが、従道は甥の投降を大そう喜んだと伝えられています。

西南戦争後は留学の経験を活かして外務省に入省した菊次郎。日清戦争で日本領となった台湾に派遣され、宜蘭支庁長として現地のインフラ整備や教育普及に尽力しました。

とくに、宜蘭川に堤防を作り、市民を水害から守った功績は、現在も「西郷堤防」と呼ばれ、その業績を称える石碑も残されているほど。

帰国後は京都市長を六年半務め、近代京都の都市基盤を築き上げるなど、父ゆずりの人望の厚さで偉業を成し遂げました。

INFORMATION

親子講座「銅像にみる鹿児島の歴史」開講

▲「歴史大好きです」と受講生

7月29日（日）、今年も小中学生を対象とした親子講座「銅像にみる鹿児島の歴史」を開講しました。35人の参加があり、普段何気なく通り過ぎてしまう銅像なども詳しく解説し、これからのまち歩きが楽しくなる講座でした。

ワークショップでは思い思いの歴史上の人物を描いたキーホルダーを制作しました。

維新ふるさと館編・福田賢治著「維新を歩く」好評発売中！

当館、特別顧問・福田賢治がラジオ放送、講演会などで語った内容をもとに新たに書き下ろしたものです。

なぜ、薩摩が明治維新で中心的役割を果たせたのかを詳細に解説し、後半では明治維新で活躍した偉人を分かりやすく丁寧に解説するとともに鹿児島市内の「維新を歩く」ためのガイドブックにもなっています。お買い求めは維新ふるさと館まで。

■価格：864円（税込）

維新ふるさとショップ

温故地新　故きを温ね、地元を新たに。

▌鹿児島中央高校１年生、文化祭で下加治屋町のジオラマ制作・発表

維新ふるさと館近くの鹿児島中央高校の生徒が文化祭での展示に下加治屋町のジオラマ「加治屋町の今昔物語」を制作しました。熱心に館内の地図を見て詳細なジオラマを作成することができたようです。

▲ジオラマは大好評

▌「よかにせ・よかおごじょ」ランキング

設置から約8ヶ月・・・果たして現在のトップは？館内で1票、よかにせ・よかおごじょに投票することができます。全年代を通してよかにせは西郷隆盛、よかおごじょは篤姫が堂々たる1位でした。

あなたも清き1票を投票してください。

▌維新ふるさとショップで薩摩琵琶展示・販売

島津日新公により創製された薩摩琵琶の伝統を守るべく「薩摩琵琶製作研究会」が薩摩琵琶を完成させました。

維新ふるさとショップでは鹿児島県指定の伝統工芸品の薩摩琵琶を展示していますので是非、ご覧ください。

◀川辺仏壇伝統工芸士との連携の賜物

【薩摩琵琶とは】

薩摩琵琶は、伊作（現在の日置市吹上町南部）常楽院の開山（創立者）宝山検校が庶民に仏教の教えを広めるために始めた、いわゆる盲僧琵琶が源流になっていると伝えられています。元来、宗教音楽であった盲僧琵琶を芸術的な琵琶音楽にしたのは、戦国時代の武将島津忠良と、当時の常楽院住職渕脇寿長院です。この頃、琵琶が大形化し、演奏法も武士の好みに合せて勇壮なものとなりました。

江戸時代になって、座頭風、士風、町風の3派に分れ、人びとに愛好され、近代になってからは、士風琵琶を継承し、明治から大正にかけて薩摩琵琶の全盛期を迎えました。

【引用：鹿児島県公式ホームページ】

鹿児島市 維新ふるさと館 Museum of the Meiji Restoration
〒892-0846 鹿児島市加治屋町23番1号　TEL.099-239-7700　FAX.099-239-7800　http://www.ishinfurusatokan.info

明治維新を分かりやすく、楽しく
維新 ISHIN
2018 AUTUMN
維新ふるさと館情報紙/No.26

生徒と労苦をともにした南洲翁の「開墾社」

南洲翁開墾地遺跡碑（吉野町）

維新を歩く

寺山自然遊歩道一帯は、タブ、スダジイなどの照葉樹林が広がっていますが、その一角に、「南洲翁開墾の地」という高さ3メートルほどの大きな碑が建てられています。碑の題字は東郷平八郎の筆によるものです。

明治6年、南洲翁は「朝鮮使節派遣問題」で大久保らと意見を異にし、中央政界から身を引き武屋敷に帰ってきました。そして翌年の明治7年6月には「私学校」を建てますが、篠原国幹や村田新八などが責任者となり、翁は実務的仕事にはほとんどかかわっていませんでした。

翁は明治8年、寺山に「開墾社」を設立し、学問によって道義に基づく人間性を養うとともに、「不毛の地を開墾し、筋骨を鍛え、精神を練り合わせて国益を興すべし」とし、心身を鍛え、国の根幹である農業や国体の重要性を体得させることを狙いとしたものでした。

開墾社には「陸軍教導団」の生徒も100人ほど入っていたといわれています。昼間は開墾に取り組み、夜は学問に励みました。宿舎には30人余りの生徒が共同生活をしたということですが、翁もときとして宿泊したといいます。翁も生徒と共に鍬を振るい、宿泊や労苦を共にして、およそ39ヘクタールもの広い荒れ地を開墾したのでした。

南洲翁自身も、県内各地の山野で狩や温泉を楽しみ、心身の保養をするとともに、この吉野台地で青少年らと共に汗を流し、農業や開墾にいそしむことによって、やっと自らの自由な生活や楽しみを取り戻したものと思われます。

南洲翁の生涯をあらためて振り返ってみると、翁は藩や国を問わず、何か都合の悪い事態が生ずるたびに、世間に引きだされる運命にあったようで、まことに気の毒な気がしてなりません。それだけ偉大な人物であったといえますが、翁が最も期待し楽しかったであろう開墾社での生徒との共同生活も、2年後の西南戦争勃発によって終わりをつげることになったのでした。

（文／福田賢治維新ふるさと館特別顧問）

ぼっけもんの夏
～菊次郎と麗しきおごじょたち～

8月3日～5日にかけて、鹿児島県演劇協会と共催で創作歴史芝居「ぼっけもんの夏～菊次郎と麗しきおごじょたち～」を開催しました。西郷隆盛の長男菊次郎の目を通した西郷像を描き、芝居後は歴史解説員などの史実解説のトークショー。

このイベントは、明治維新150周年事業の一環で行われたもので、主役の西郷は劇団「鳴かず飛ばず」主宰の米田翔太さん、演出は「上町クローズライン」代表の宇都大作さんが務めました。

冒頭では西郷ロボットも登場し、米田さん扮する西郷さんとミニコントを行い、会場を沸かせました。また、西郷の弟従道の子孫である西郷真悠子さんが全日ゲストで登壇し、各日の解説員らとのトークショーを行いました。

「笑いの中に史実が盛り込まれて楽しかった。ホロリと涙を誘う場面もあり良かった」や「現在流行っているものの取り入れ方、ちゃんとしたシーンの部分、見やすくて面白かった。演劇への興味・歴史への興味が湧いた」などの感想をいただきました。

▲入場者は3日間で約380人。連日盛況

150周年記念 歴史シンポジウム開催

8月10日、サンエールかごしまで明治維新150周年記念歴史シンポジウム「西郷DNA～語り継ぐもの～」を、NHKアナウンサー内美登志さんの司会で開催しました。

第1部は「明治維新と西郷家の人々」と題し、明治大学文学部教授の落合弘樹氏が基調講演を行いました。第2部は、落合氏、NPO西郷隆盛公奉賛会理事長西郷隆文氏、西郷南洲顕彰館徳永和喜館長、福田賢治特別顧問の4人がパネリストとなり、肥後秀昭歴史解説員のコーディネートで、「“西郷南洲翁と菊次郎”～菊次郎の素顔は?～」をテーマに議論しました。

熱心にメモを取ったり、うなずきながらパネリストの話に耳を傾けたりする姿が見られました。「本やテレビに出ていないことを生の声で聞けて、歴史にさらに興味が出てきました。ますますのめり込みそうです」や「とても勉強になる話がたくさん聞けて楽しかったです。どんな題にも詳しく答える先生方に憧れます」など有難い感想をいただきました。

次回のシンポジウムは12月です。詳細が決まり次第お知らせします。こうご期待!

▲第1部／基調講演

▲第2部／シンポジウム

今回のイチオシ

武村の西郷屋敷画

西郷隆盛は、戊辰戦争が終結した明治2年（1869）6月に鹿児島に帰り、7月武村の寿国寺近くの屋敷690坪を三崎平太左衛門から譲り受けました。明治6年の朝鮮使節派遣問題で、政府の役人を辞めた西郷は、温泉巡りと狩りを趣味とする悠々自適の生活を始めます。

明治7年に私学校を設立、翌8年には吉野に開墾社を開き、長男の菊次郎を入学させました。自然との格闘という開墾を通して、人間としての心を鍛えさせようとしたのです。その同じころ、西郷家に山形県から8人の来客が訪れます。かつての庄内藩家老菅実秀と石川静正らです。

20数日、滞在する間に、石川静正は西郷の武屋敷の風景と屋敷を写生しました。静正の日記によると「屋敷は柴の垣根で囲まれ、細い門柱には小さな西郷吉之助の木札がかけられている。門の右手の物置小屋には犬がつながれ、左手は入口の土間になっている。玄関などはなく、訪問客はいつも庭の方から座敷に上がり込んでいた。座敷の前には大きな松の木が4、5本あるのみで、桜島がよく見える絶景の地であった」と記されています。ここで西郷が、菅実秀を初めそれまで西郷の下を訪れた庄内藩の来客と談じた内容を、明治22年西郷の賊名が解かれたのを契機に、まとめられたのが「南洲翁遺訓」です。

静正が写生し、西郷南洲顕彰館が所蔵する「武村の西郷屋敷図」（掛け軸仕様）と見比べるとその概要がさらによく理解できると思われます。

▲武村の西郷屋敷画

▲武村の西郷屋敷図

天保14年城下絵図、観光客に好評

本図は、昭和10年発行の「薩藩沿革地圖」中に収められている「天保14年鹿児島城下絵図」を拡大し、主な建物や通りなどを分かりやすく書き入れたもので、鹿児島城（鶴丸城）を中心とした町づくりの様子がよく分かります。当館1階に展示。観光客の皆さんに好評です。

城下絵図の大きさは縦104cm、横222cm。

南洲翁の子息 西郷菊次郎の知られざる素顔。

温故維新マップ 寄道

西郷菊次郎 年表

1861年1月2日	西郷隆盛と愛加那の長子として奄美大島龍郷で生まれる
1869年	父西郷隆盛の許（鹿児島西郷本家）に引き取られる…9歳
1872年2月28日	横浜を出港し米国へ留学…13歳
1874年7月	帰国
1875年4月	吉野開墾社に入る…15歳
1877年2月17日	父隆盛に従って出立、西南の役に従軍…17歳 熊本での戦いで右足膝下に銃弾を受け、 川尻の野戦病院にて切断
1880年2月	奄美大島龍郷に里帰りし、実母愛加那と再開…20歳
1884年5月	外務省御用掛として勤務…24歳
1885年1月	外務書記生として米国に赴任、 ワシントンの日本公使館勤務…25歳
1887年7月	公使館職員を依願免職、 留学生の立場が認められ外務省より学費支給
1890年	帰国、宮内省式部官に採用…30歳 （身分は式部官であるが仕事は農商務省で通商に関する調査を担当）
1891年8月	外務省試補に、その後外務省翻訳官に任ぜられる…31歳
1891年12月	胃病を患い静養のため辞職、鹿児島へ帰郷
1893年1月	永吉久子と結婚…33歳
1895年5月	台湾総督府参事官心得となる…35歳
1895年8月	東京から台湾へ向かう途次、鹿児島と奄美大島に立ち寄る
1896年4月29日	台北県支庁長並びに基隆支庁長に任命される…36歳
1897年5月27日	宜蘭庁長に任命される…37歳
1901年9月	宜蘭川堤防（西郷堤防）完成…41歳
1902年12月	宜蘭庁長退官…42歳 奄美大島龍郷に帰郷、その後鹿児島へ
1904年10月	京都市長就任…44歳
1910年5月	台湾協会学校（現拓殖大学）評議員就任…50歳
1911年5月23日	京都市長辞任…51歳
1912年7月7日	永野金山鳥津鉱業館長就任…52歳
1913年5月	東洋協会学校（現拓殖大学）評議員辞任…53歳
1920年1月15日	永野金山鳥津鉱業館長依願退職…60歳
1928年11月27日	鹿児島で逝去…68歳

南洲翁

板垣文書1～3（個人蔵）

誕生地から鹿児島へ

「菊次郎」（京都市上下水道局提供）

菊次郎の誕生地

菊次郎と西南戦争

錦絵「鹿児嶋記事」

「放免書付」（個人蔵）

「西郷菊次郎 療養の地」

宜蘭庁長時代

「宜蘭庁長辞令書」（拓殖大学蔵）

「西郷菊次郎宜蘭庁舎」（古木圭介氏提供）

「西郷庁憲政碑と宜蘭川」（古木圭介氏提供）

京都市長時代～島津鉱業館 館長時代

「家族写真」（個人提供）

「島津家鉱業館館長
西郷菊次郎宛封書」（拓殖大学蔵）

「京都市長就任通知書」（京都市上下水道局提供）

「西郷菊次郎頌徳之碑」（さつま町役場提供）